

●提案 図書 啓展

学力の基礎をどのように積み上げていくとよいのか。教師が「歩踏み出すための足固めとなる学力づくりの方法を常任委員長図書先生より教わりましたので紹介します。

一、読み書き

音読指導では、聴き手を意識し日頃から、声を出す習慣を身につける必要があります。

相手に伝わる声を出すためには、「かつとばせ都道府県」や「リズム漢字」で楽しく脳に記憶させることができます。漢字の学習も読みを先行させながら「考える力」を育てるため漢字当番があります。例に出すと漢字の決まり①部位を二つにわけ②左から右へ進む③上から下へ進む決まりを教え、その技を使って凹凸の画数を考えます。

また考える力には、語彙力はつきものです。語彙力をつけるために本嫌いな子を作らない3つの条件があります。①大人も一緒に本を読む。②読み終わりの感想は、しつこく聞かない。③年齢に応じた本に限らず幅広く読む。

二、計算

算数の学習で要となるのは、4年生の計算です。割り算ができない実態は九九や引き算につまずきが見られます。わり算でどの部分につまずきがあるのか見抜きましよう。

子どもたちの配慮すべき点をもう一度原点に戻ってふりかえり、基礎学力の確かさを見直す機会となった講座でした。

○底上げ、心地よさ、さじ加減

●提案 岡 篤

冒頭に、現在の教育情勢に対する学力実践の意義が語られた。日常生活の中で、グローバル化が子どもたちの成長にどれだけ資するのかという疑問を語ることで、読み書き計算の実践と、子どもたちの変容がより際立つことになった。

まず、背景にさまざまな困難を抱えている子どもたちに対して、超スモールステップを設定して、底上げをはかり、学習にむかうことのできる集団へと育てていく実践が語られた。

「底上げ」と「心地よさ」の事例として、書写ノートの丸つけ方法が提示された。たったひとつの〇がついたことで、お互いにその数を比べて喜び合う子どもへと変容していく様子に、「それ、ある、

ある。」と感じた参加者が多かった。また、逆に、そんな些細なことで子どもが変容するのかもしれない参加者の反応もあった。

また、百マス計算、割り算のABC型の違い、それぞれを進める上で配慮すべき事柄などが、具体的に提示された。それぞれ具体的に説得力のあるものだったので、自分のクラスの実態に合わせて「さじ加減」をすることが、ポイントだということがよくわかった。

質問に対する答えの中で、実態に合わせたスモールステップの具体的な例も示され、参加者からは、「底上げ」「心地よさ」「さじ加減」という、3つのキーワードがわかりやすく、2学期からさっそくできることが提示されていて、たいへん好評だった。